

令和元年6月14日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370012

研究課題名(和文) セラーズの哲学と20世紀英米圏における实在論哲学の影響関係をめぐる研究

研究課題名(英文) Wilfrid Sellars and the philosophical realism in the 20th century Anglophone world

研究代表者

三谷 尚澄 (Mitani, Naozumi)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：60549377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：研究課題であるウィルフリッド・セラーズの哲学が有する实在論的性格について、次の諸点を明らかにした。(1)「進化的自然主義」、「社会プラグマティズム」、「所与」、「真理」、「メタ言語的唯名論」、「プラグマティックな表出主義」等のキーワードに着目しつつ、セラーズの哲学をその現代的後継者たち(ミリカン、ブランドム、プライスなど)との比較・対照のもとに描き出す論文を作成・公表した。(2)セラーズにおける「プロセス・オントロジー」の理論に注目し、その枠組みを「知覚経験」や「写像」の分析に適用することによって、セラーズにおける「实在的世界」のあり方がどのような仕方で明確にされうるかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英米圏を中心に、セラーズの哲学に対する関心がかつてないほどに高まりつつある。加えて、「形而上学を回避する分析哲学」という一般的評価を覆し、「分析哲学の手法を用いた新しい形而上学」の樹立を目指す動向もまた、近年大きな注目を集めている。この大きな流れに合流しつつ、セラーズ哲学の全体像を「实在論の哲学」というキーワードに基づきつつ描き出し、「現代哲学の最先端にいまも生きるセラーズ」の姿を浮き彫りにした点に本研究の学術的意義は見出される。

研究成果の概要(英文)：This research project focused on the philosophy of Wilfrid Sellars and aimed to clarify its core structure under the heading of "realism". The topics taken up and considered were the following: "evolutionary naturalism", "social pragmatism", "given", "truth", "metalinguistic nominalism", and "pragmatic expressivism". Also, this project shed a new light on Sellars's theory of "process ontology" and clarified how that unduly neglected aspect of Sellars regains the philosophical potential it deserves.

研究分野：人文学

キーワード：实在論 セラーズ ブランドム ミリカン 表出主義 プラグマティズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 英米圏を中心に、セラーズの哲学への注目はかつてないほどに高まりつつある。そして、この間の背景的事情として、以下の諸点を指摘しておくことができる。Richard Rorty, Bas van Fraassen, Daniel Dennett, Robert Brandom, John McDowell, Paul Churchland, Ruth Millikan, Michael Williams, Huw Price 等、現代の英米圏における「論争の中心点」を構成する驚くほど多くの哲学者たちが、セラーズの決定的な影響下にその主張を展開してきた。

(2) ただし、同時に、あるセラーズ研究者が指摘する通り、これらの哲学者たちのあいだには、「セラーズが知的祖先であることを除いては、実質的な意見の一致をまったく見出すことができない」(Garfield [1989])ほどの隔たりがあることも事実である。たとえば、「心や規範の自然主義的還元」というプログラムをめぐって、その徹底的な遂行を主張する Churchland や Millikan など「右派セラーズ主義者」たちと、その原理的不可能性を強調する Brandom や McDowell など「左派セラーズ主義者」たちの極端な意見の食い違いをみれば、その間の事情は明らかであろう。

(3) 以上の事実から、次のような研究の必要性が逆説的に浮き彫りにされる。すなわち、「驚くほど多様かつ重要な画期的業績がセラーズの影響下に成立していることは分かった。しかし、本当のセラーズは一体どのようなことを主張しているのか」。この問いに対して、明確かつ堅実な論拠に基づいた回答を与える研究の必要性が強調される。

(4) 「セラーズ自身のテキストに基づいた、体系的セラーズ像の解明」というテーマに関する先行研究と最新の研究動向として、以下の4点を指摘しておくことができる。

ここ10年間で、「正統派」に属するセラーズ解釈者(Jay Rosenberg, Willem deVries, James O'shea, Mark Lance, Johanna Seibt など)が、セラーズ哲学の全体像を偏りなく見通すための優れた水準での先行研究を相次いで発表した。

セラーズ自身の業績をバランスよくおさめた論文集(*In the Space of Reasons* [2007])、主著「経験論と心の哲学」[1956]への詳細なコメンタリー(deVries & Triplett, *Knowledge, Mind, and the Given* [2000])の出版など、体系的セラーズ研究にとりかかるためのアプローチ・ルートが着実に整備されつつある。

セラーズ研究に特化した研究者共同体(Wilfrid Sellars Society)の設立により、最新の研究情報の共有・情報交換・オンライン上での議論が可能になった。

ピッツバーグ大学図書館にセラーズ文庫が設置され、セラーズ本人の手書き草稿や書簡のシステマティックな利用が可能となった。

(5) しかしながら、上述のような充実を示すセラーズ研究の動向については、そのマイナス面ないし今後埋められるべき研究課題として、哲学的視点に依拠した研究業績の意外なほどの不在という顕著な傾向を指摘せざるをえない。セラーズの哲学体系が、カント・論理実証主義・古典的プラグマティズム・本研究のテーマである英米圏の实在論哲学との密接なつながりのもとに構築されてきたことを思うとき、このことは顕著となる。

2. 研究の目的

以上の背景を受けて、本研究は、「ウィルフリッド・セラーズの哲学について、とくに20世紀英米圏における实在論哲学との影響関係に注目しつつ、その全貌を明らかにする」ことを目的として遂行された。

「形而上学を回避する分析哲学」という一般的評価を覆し、「分析哲学の手法を用いた新しい形而上学」の樹立を目指す動向が、近年大きな注目を集めているが、本研究は、この大きな流れに合流しつつ、セラーズ哲学の全体像を「实在論の哲学」というキーワードに基づきつつ描き出し、「現代哲学の最先端にいまも生きるセラーズ」の姿を浮き彫りにすることを目指したわけである。

3. 研究の方法

研究課題であるウィルフリッド・セラーズの哲学が有する实在論的性格について、以下の方法で研究を行なった。

(1) 「進化的自然主義」、「社会プラグマティズム」、「所与」、「真理」、「メタ言語的唯名論」、「プラグマティックな表出主義」等のキーワードに着目しつつ、セラーズの哲学をその現代的後継者たち(ミリカン、ブランダム、プライスなど)との比較・対照のもとに描き出す論文を作成・公表した。

(2) セラーズにおける「プロセス・オントロジー」の理論に注目し、その枠組みを「知覚経験」や「写像」の分析に適用することによって、セラーズにおける「实在的世界」のあり方がどのような仕方で明確にされうるかを明らかにした。

4. 研究成果

(1) 「進化的自然主義」というキーワードとのつながりからセラーズの哲学体系のあり方を明らかにする」という点において、研究成果を得た。より具体的には、セラーズの後継者であるルース・ミリカンとロバート・ブランダムの理論とセラーズ自身の哲学を比較・検討し、セラーズの哲学には一見対立するかにみえるミリカンの「進化的自然主義」とブランダム「社会プラグマティズム」を総合的に取り込む哲学的ポテンシャルが見出されうることを明らかにした。

また、本項目に関連する研究成果を、応用哲学会、The Second Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (2nd CCPEA)、The Collective Intentionality IX において発表するとともに、論文「『The Return of the Dad: On Millikan-Brandom Debate about the Legacy of Wilfrid Sellars』」として公開した。

(2) セラース哲学のキーワードである「所与」概念について、従来提示されたことのない新しい視点からのアプローチを試みた。より具体的には、7世紀インドで仏教論認識論を展開したダルマキールティの「アーカーラ」という概念とセラースにおける「所与」概念の関係について、比較哲学的観点からの検討を行った。

(3) 「アメリカにおけるプラグマティズムの伝統とセラースの哲学との関係を明らかにする」という課題の遂行において、一定の成果を得た。より具体的には、セラースの哲学を根本のところまで特徴付ける「メタ言語的唯名論」の発想について、それがセラースの後継者であるブランダムの「プラグマティックな表出主義」においてどのような仕方でも継承されているかを明らかにした。そして、このことを通じて、「プラグマティスト」としての性格づけから距離を取ろうとするセラース自身の言明にもかかわらず、セラースの哲学をプラグマティズムの伝統の内部に位置付けることが可能であることを明確にした。なお、その研究成果については、関西哲学会における共同討議「真理論」の提題発表として公表した。

(4) 「世界の実在的あり方」を記述する哲学的モデルの一つである「絶対プロセス」の理論に注目し、そのセラース的枠組みを「知覚経験」の分析に適用することによって、セラースにおける「実在的世界の知覚」のあり方がどのような仕方でも明確にされうるかを明らかにした。なお、その研究成果については、国際ワークショップ「Comparative Philosophy of Perception」で発表した。

(5) 現代アメリカを代表するセラース派の哲学者であるロバート・ブランダムに注目し、ヒュー・プライスやルース・ミリカンといった(ブランダム同様、セラースに決定的な影響下に独自の理論を構築している)哲学者との対比を通じて、「表出主義的プラグマティズム」の立場から提出されたブランダムに注目し、その哲学的意義と射程を評価した。また、その研究成果を、査読誌論文として公表した。(「表出主義的プラグマティストの真理観」、『アルケー』)

(6) セラース哲学における「写像」の理論に焦点を合わせ、通例セラースに好意的な解釈者の間ですら積極的な評価がなされてこなかったその哲学的意義を明らかにした。より具体的には、ルース・ミリカンによるセラースの写像解釈が取りあげられ、ミリカンの解釈がはらむ弱点の指摘とともに、セラースのテキストを適切に解釈するとき、彼の写像の理論にどのような哲学的ポテンシャルが見出されうることになるかを論じた。また、その研究成果を、査読誌論文として公表した。(Naozumi Mitani, Picturing and Meta-Linguistic Expressivism, Contemporary and Applied Philosophy, Selected Papers of 2nd CCPEA)

(7) セラースの哲学が有する存在論的性格について、主に後期セラースの存在論的立場を特徴づける「絶対プロセスの形而上学」に焦点をあわせて研究を行った。より具体的には、以下のよう内容で研究を行った。

「絶対プロセスの形而上学」を言語哲学的な側面から分析した「主体(主語)なしの生起 subjectless occurrences」と呼ばれるセラースの発想にとくに注目し、その哲学的意義を明らかにした。後期セラースの形而上学を対象とする研究の中でも、「主体(主語)なしの生起」にとくに注目した研究は皆無といってよい状況にあるが、「主語なし」で文章を構成することのできる日本語の特性を媒介にすることで、取り扱いの難しい(すなわち統一的解釈の困難な)後期セラースの哲学を読み解くための視座を提供することができるのではないか、という発想がこの研究の大きな特長である。

(8) 「プロセスの形而上学」と「存在論的一元論」という二つの存在論的立場について、その相互の関係性がどのようになっているのか、を明らかにする研究を行った。両者とも、「形而上学を回避する分析哲学」の傾向を覆し、「分析哲学の手法を用いた新しい形而上学」の動向として近年大きな注目を集め、かつ、大きな成果を収めつつある分野であるにもかかわらず、両者の関係を問う研究はほとんどなされていない現状に一石を投じることを目指したわけである。本研究の大きな成果として、「主体(主語)なしの生起」という特性に注目することで、後期セラースの形而上学を、西田幾多郎や道元といった日本思想の代表的な立場との連続性のもとに位置付けることができるのではないか、という独創的な着想を得ることができた。

(9) 「何が実在するのか」をめぐるセラースの中核的思考を、後期セラースにおける「プロセスの形而上学」との密接なつながりにおいて描きだすことができたが、これは、注目されることの不当にすくなかった観点からセラース哲学の骨格を描きだす点で十分に意義ある業績であると考えている。また、その全体像を明確に見通すことのできない後期セラースの哲学を、道元や西田といった日本哲学の伝統とのつながりにおいて検討することを通じて、その哲学的重要性を示すことができたが、これも「セラースにおける実在」の理解をめぐる仕事として十分な意義を認めることができると考えている。また、国内外におけるワークショップでの発表と、国際共著書にも論文が受理されたことから、おおむね順調な研究成果を得ることができたと考えている。

(10) 交付申請書に記載した「研究の目的」に則した内容の研究を、国内・国外の定評ある複数の学会で発表し、また、英語、日本語の双方で論文(査読有)として公表することができた。

以上からも、本研究の目的については、おおむね順調に達成することができたと判断している。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

三谷尚澄、Robert B. Brandom, From Empiricism to Expressivism: Brandom reads Sellars
日本カント研究、査読無(招待原稿) 第18巻、2017、pp. 184-188

Naozumi Mitani, Picturing and Meta-Linguistic Expressivism, Contemporary and Applied Philosophy: Selected Papers of 2nd CCPEA, 査読有、2016、50-69

三谷尚澄、表出主義的プラグマティストの真理観、アルケー、査読無(招待論文) 2016、1-14

Naozumi Mitani, The Return of the Dad: On Millikan-Brandom Debate about the Legacy of Wilfrid Sellars, The Shinshu Studies in Humanities, 査読有, Vol. 2, 2015, 31-42

〔学会発表〕(計8件)

Naozumi Mitani, On the Elusiveness of Dogen's Ontology: Processistic monism with an ineffabilist turn, New York Workshop on the Cosmos of Dogen, 2018

Naozumi Mitani, On the Depth Grammar of Being a Person: What happens when Sellarsian philosophers meet Fusion Philosophy?, Thursday Seminar, 2016

Naozumi Mitani, On the philosophical grammar of perception: A Sellarsian approach, The 1st International Workshop on Comparative Philosophy of Perception, 2015

三谷尚澄、表出主義的プラグマティストの真理観、関西哲学会、2015

Naozumi Mitani, What Do We Do When We Are Engaged in Comparative Philosophy?, Philosophy Across Cultures: Transmission, Translation and Transformation of Thought, 2015

Naozumi Mitani, The Return of the Dad: On Millikan-Brandom debate about the legacy of Wilfrid Sellars, The Second Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (2nd CCPEA), 2014

Naozumi Mitani, Some Reflections on the Social Origin of Intentionality: A Sellarsian Perspective, The Collective Intentionality IX, 2014

三谷尚澄、人はいつ、いかにして理由の空間の住人となるのか、応用哲学会、2014

〔図書〕(計2件)

Naozumi Mitani, The World in which Everything is the Self: The Philosophy of the Original Image and Pan-Self-ism, in Jay Garfield (ed.), *Wilfrid Sellars and Buddhist Philosophy*, Routledge, 2019, 3-31

三谷尚澄、カントにおける生と死の倫理学、牧野英二編『新・カント読本』、法政大学出版、2018年、279-291

6 . 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。